

ISSN 2434-0138
2018年10月3日発行

GENSEI-SEIBUTSU

原生生物

第1卷 第2号 (2018)

日本原生生物学会
Japan Society of Protistology
<http://protistology.jp>

目次

第51回日本原生生物学会大会（松江）のご案内（第2報） 児玉 有紀（島根大学）	1
国際委員からの報告～日韓合同原生生物学会議（済州島）報告～ 春本 晃江（奈良女子大学）	6
日韓合同原生生物学会議への派遣助成者の参加報告	8
活性化委員会からのお知らせ 園部 誠司（兵庫県立大学）	11
学会等開催情報	11
若手の会通信 会長挨拶 柴田 あいか（立命館大学）	12
「原生生物」投稿規定	14
編集委員会からのお知らせ 廣野 雅文（法政大学）	16
事務局からのお知らせ 細谷 浩史（神奈川大学）	16

第51回日本原生生物学会大会（松江）のご案内（第2報）

大会長 児玉 有紀（島根大学）

第51回日本原生生物学会大会は、10月19日（金）から21日（日）までの3日間、島根大学（松江キャンパス）において開催されます。大会3日目には、「実はこんなに魅力的！理科教育に役立つ原生生物たち」というタイトルで、準会員制度の宣伝も兼ねて、学校教員の方々を対象とした公開シンポジウムを計画しております。懇親会は、国宝松江城内の興雲閣で行います。懇親会では島根県の郷土芸能もご覧いただけます。皆様に満足していただける学会になるよう、鋭意準備を進めております。ぜひ多くの方のご参加をお待ちしております。

詳しくは、松江大会ホームページ（以後大会HP、<https://sites.google.com/site/protistology2018matsue/>）をご覧ください。事前参加登録と演題登録は8月19日（日）で締め切りでしたが、参加登録は引き続きお受けしています。準備の都合上、お早めのご登録をお願い致します。大会HPにて随時情報の更新を行いますので、各自で定期的にご確認ください。

1. 会期 平成30年10月19日（金）、20日（土）、21日（日）

2. 会場 島根大学・松江キャンパス (http://www.shimane-u.ac.jp/campus_maps/map_matsue.html)



3. 松江大会 [大会長] 児玉 有紀
 実行委員会構成 [実行委員] 石田 秀樹, 塚越 亮允

4. 日程

以下のスケジュール表をご覧ください。

	19 日 (金)	20 日 (土)	21 日 (日)
8:30		受付開始 (~ 15:00) 教養 403	受付開始 (~ 13:30) 教養 403
8:50		開会 大学ホール	
9:00		口頭発表 □ 大学ホール	口頭発表 □ 大学ホール
9:30			
10:00			
10:30			
11:00			
11:20			
11:30		昼休み ☺	BPA 賞授賞式 ☺ 大学ホール
12:00			昼休み ☺
12:30			
13:00	受付開始 (~ 16:00) 生資 203 前	ポスター発表 教養 404	公開シンポジウム □ 大学ホール
13:30		13:00 ~ 14:00 奇数番号発表	
14:00	編集委員会 生資 11F	14:00 ~ 15:00 偶数番号発表	
14:30	評議員会 生資 11F	記念撮影、総会 大学ホール	
15:00			
15:20			閉会 大学ホール
15:30		若手の会 ☺	
16:00		授賞式、受賞者講演 ☺ 大学ホール	
16:30			
17:00		生資 203	
17:30		バスで興雲閣まで移動 🚌	
17:50		興雲閣に到着 🚌	
18:00	若手の会・評議員会合同 懇親会 ☺ ニコラ (第二食堂) 2F	懇親会開始まで松江城や 水燈路をお楽しみください!	
18:30		懇親会 ☺ 興雲閣	
19:00			
19:30			
20:00			
20:30			
21:00		興雲閣を出発 🚌	
21:15		JR 松江駅北口到着 🚌	

最新の情報は大会 HP でご確認ください。

- 生資 11F → 生物資源科学部 1号館 11階セミナー室
- 生資 203 → 生物資源科学部 1号館 2階会議室 (203)
- 教養 403 → 教養講義室棟 2号館 1階 403 講義室
- 教養 404 → 教養講義室棟 2号館 1階 404 講義室

5. 宿泊情報 宿泊は松江駅周辺が便利です。
大会 HP 宿泊・観光のご案内 (<https://sites.google.com/site/protistology2018matsue/home/syukuhaku>)をご参考に、各自でご予約ください。
6. アクセス情報 大学内および大学周辺に駐車場はほとんどありません。
公共の交通機関でお越しください。
松江駅から大学まではバスのご利用が便利です。乗車されるバスによって所要時間が異なります(15～40分)。各バス会社の時刻表は、大会 HP の島根大学までのアクセス (<https://sites.google.com/site/protistology2018matsue/home/access>)に掲載しています。
7. 昼食
- 学食の営業時間等はこちら (<https://www.shimadai.coop/cafeteria/57>)をご覧ください。
 - 正門付近には、コンビニ、お弁当屋、ラーメン屋、定食屋等がございます。
 - 21日(日)は学食は休業です。
 - 事前参加登録時にお弁当を注文された方は、21日の昼休みに大会本部でお受け取りください。
8. 荷物・貴重品等の管理 大会中、クローク等をご用意いたしません。
貴重品等を含め、荷物は各自で管理をお願いします。
9. 参加予定の皆様へ
1. 参加登録
 - 事前参加登録は8月19日(水)に締め切りでしたが、**参加登録は引き続きお受けしています。**準備の都合上、お早めのご登録をお願い致します。
 2. 諸経費の支払い
 - **参加登録手続き後1週間以内に、以下のゆうちょ銀行の口座へ大会参加費および大会懇親会費のお振込をお願い致します。**振込手数料は各自ご負担下さい。

「大会参加費」
一般会員：4,000円
学生会員：1,000円

「大会懇親会費」
一般会員：6,000円
学生会員：3,000円

「若手の会・評議委員会合同懇親会費」(当日徴収、参加者のみ)
一般会員：4,000円、学生会員：2,000円

※給与のある「ポスドク」は一般会員となります。
※事前登録期間後は、一般の参加費と大会懇親会費が1,000円ずつ高くなっています。
 3. 振込み方法

今年度から振込用紙を使った送金には対応しておりません。ご注意ください。

 - ゆうちょ銀行以外の金融機関からお振込の方は、以下の情報をご指定ください。

【店名】〇六八(読み ゼロロクハチ)
【店番】068
【預金種目】普通預金
【口座番号】4364504
【口座名】ゲンセイセイブツガツカイネンジタイカイ
 - ゆうちょ銀行からお振込の方は、以下の情報をご指定ください。

【記号】10650
【番号】43645041
【口座名】ゲンセイセイブツガツカイネンジタイカイ

4. 参加登録

- 参加の申込みは、以下の「参加申込用フォーマット」を電子メールにそのまま貼り付けて大会事務局 (protistology2018@gmail.com) へお送りください。
- 件名は「参加登録: (参加登録者氏名)」としてください。
- 本大会の開催にあたり、松江市および島根県の学会・コンベンション開催支援補助金制度を利用致します。ご宿泊日数 (予定) の回答にご協力ください。
※電子メールをご利用にならない場合は、0852 - 32 - 6438 (児玉のオフィス) までご連絡ください。

「参加申込用フォーマット」

.....

「参加申込」

- 1) 郵便番号:
- 2) 住所:
- 3) 所属:
- 4) 氏名 (ふりがな): ()
- 5) 電子メールアドレス:
- 6) 電話番号:
- 7) 参加費区分: 一般 ・ 学生 (どちらかを消去)
- 8) 大会懇親会: 参加 ・ 不参加 (どちらかを消去)
- 9) 若手の会・評議員会合同懇親会: 参加 ・ 不参加 (どちらかを消去)
- 10) 振込金額 (総額) (円):
- 11) 振込予定日:
- 12) 宿泊日数 (予定): 泊

.....

10. 講演予定の皆様へ

1. 演題登録期間

8月19日(日)に締め切りました。

2. 発表資格

- 登壇者としての発表は1人1題とし、登壇者は会員に限られます (招待講演者と中高生の発表は除く)。
- 学会未入会の場合には講演を取り消すことがあります (招待講演者と中高生の発表は除く)。
- 日本原生物学会への入会手続きについては、日本原生物学会事務局庶務 (http://protistology.jp/entry_sheet.html) にお問い合わせください。

3. 講演区分

- 口頭発表あるいはポスター発表のどちらかです。

4. BPA 賞

- 6 月末で満 35 歳以下の発表者で且つ当該研究を筆頭で推進した方を対象に、「ベストプレゼンテーション賞 (BPA)」を選考・授与します。

5. 口頭発表を予定されている方

- 発表時間は 15 分です (発表 12 分, 討論 3 分)。
- 発表には液晶プロジェクターを使用します。
- 各自でパソコンをお持ちください。
- パソコンの操作は発表者をお願いします。プロジェクターとの相性の問題がありますので、予め動作確認をお願いいたします。
- 液晶プロジェクターのコネクターは、一般的なミニ D-Sub15 ピンとなります。HDMI 端子は接続できませんので、アダプターは各自でご持参ください。35 mm スライドおよび OHP は使用できません。
- パソコンをお持ちになれない方は、事前にご連絡ください。

6. ポスター発表を予定されている方

- ポスター発表のスペースは一人当たり, 縦 174 cm, 横 115 cm 以内です.
- 貼り付けに使う画鋏は大会本部で用意します.
- 会場の各パネルに演題番号がありますので, 割当のパネルに掲示して下さい.
- 閉会後に回収されなかったポスターは事務局で処分いたします.
- ポスターの事前受取や事後送付は行いません.

11. 懇親会

- 19 日 (金) の若手の会・評議員会合同懇親会は島根大学, 第二食堂で行います.
- 20 日 (土) の大会懇親会は興雲閣で行います.
- 20 日の表彰式・受賞者講演終了後に, バスで興雲閣まで移動していただきます. 所要時間は 20 分程度です.
- 懇親会当日は, 松江水燈路の開催期間中で, 松江城周辺がライトアップされています.
- 懇親会開始までは約 30 分間ございます. 国宝松江城や水燈路をお楽しみください.
- 懇親会では, 地元の食材を使った料理をビュッフェ形式で提供予定です.
- 地酒は 15 種類以上 (松江・出雲・雲南・広瀬・隠岐等), 島根県産ワインや島根県産焼酎も提供予定です.
- 21 時に興雲閣出発予定のバスで, JR 松江駅北口までお送りします. 松江駅周辺には居酒屋等が多数ございます.



懇親会の会場

12. 松江大会
事務局

島根大学学術研究院農生命科学系
〒690 - 8504 島根県松江市西川津町 1060
児玉 有紀
TEL : 0852 - 32 - 6438
E-mail: protistology2018@gmail.com, kodama@life.shimane-u.ac.jp

国際委員からの報告～日韓合同原生生物学会議（済州島）報告～ 春本 晃江（奈良女子大学）

2018 年 7 月 13 日から 7 月 15 日に日韓合同原生生物学会議が韓国の済州島（Jeju Island）で行われた。日本からの参加者は 19 名で、韓国の原生生物学会（Korean Society of Protistologists: KSOP）の会員を入れて約 60 名の参加者があった。

この日韓合同会議は、2015 年に東京（国立感染症研究所）で開かれた第 48 回日本原生生物学会（八木田健司大会長）において、「日韓合同シンポジウム」が実施されたことがきっかけである。今回は、今年度で日本での開催を打診されていた。2017 年のプラハで行われた第 15 回国際原生生物学会（International Congress of Protistology: ICOP）で、KSOP の会長と国際委員らから、日本原生生物学会の国際委員である春本に、再度、この大会について確認があり、その後、日本の原生生物学会で WG を立ち上げて対応してきたものである。一時は合同開催が危ぶまれたが、韓国と日本の関係者の努力で開催にこぎつけることができた。特に、韓国側の前会長の Mann Kyoon Shin 氏、現会長の Myeong Heon Shin 氏、国際委員の Soon-Jung Park 氏には深く感謝を申し上げたい。また、昨年度の日本原生生物学会筑波大会の評議員会と総会で、この大会に経済的な支援（50 万円）をいただくことで合意していただき、シンポジウムの演者に 6 万円、参加の大学院生に 2 万円を支給できたことはありがたかった。シンポジウムのタイトルは、“Emerging Young Researchers at the Cutting-edge of Protistology in Korea and Japan”とし、博士の学位を 2012 年 4 月以降に取得した若手研究者に限定して募集を行った。嬉しいことに、予定人数を超える申し込みがあり、これまでの業績と独創性、日本原

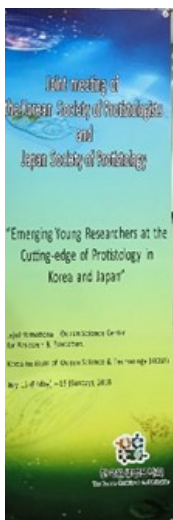


シンポジウム会場にて最初の挨拶をされる沼田会長、右から 2 人目は韓国の原生生物学会会長（写真は小林富美恵副会長のご好意による）

生生物学会や若手の会への貢献度、分野や材料の多様性も考慮して発表者を決めさせていただいた。支援できなかった方々には誠に申し訳かったが、どうかご理解いただきたい。

日韓合同原生生物学会議の初日、日本は猛暑の真ただ中であつた。済州国際空港に降り立つと、それほど気温は高くはなかったが、世界遺産のいくつかを保有する観光地でもある済州島の熱気が伝わってきた。

韓国側が特別料金で予約してくださった Ramada Jeju Hamdeok Hotel の部屋は広く清潔で、ホテルから 5 分ほど歩くと、きれいな砂浜が広がる海岸に出られた。日本からの参加者は全員このホテルに滞在した。Welcome Reception はホテル近くの海鮮料理のレストランで行われた。数え切れないほどの前菜、タイやヒラメの船盛



左はポスターセッションの様子と大会の看板
上は日韓合同会議の会場となったKorea Institute of Ocean Science and Technology (KIOST)
（写真は内之宮光紀会員のご好意による）

や魚介類のスープがテーブルの上のところ狭しと並べられ、KSOP の方々のおもてなしの気持ちが伝わってきた。韓国のお酒マッコリやビールが振舞われ、座は大いに盛り上がった。

翌朝は大型バスがホテルまで迎えに来てくれ、30 分ほどで会場の Korea Institute of Ocean Science and Technology (KIOST) に到着した。Registration を済ませたあと、KSOP 会長の挨拶、日本原生物学会の沼田会長の挨拶があり、シンポジウムがはじまった。韓国側と日本側それぞれ 6 名の若手研究者の発表があった。発表時間 20 分、質疑応答 5 分間で、比較的じっくりと演者の話を聞くことができたのではないかと思う。韓国側の発表は分類学と生態学の話が多く、多くのデータを丹念に分析している様子が見えた。日本側の発表は様々な分野におよび、手法も分子・形態・数理的解析など多岐にわたっており、両国共に若い研究者の意欲とたくましさを感じた。シンポジウムの最後には、特別講演として Wonho Yih 教授による *Mesodinium* の研究の歴史についての話があり興味深く聴いた。ポスターセッションは 1 時間であった。もう少し時間があれば、詳しくポスターを見ることができたのだが、あとで何人もの方から意見を聞いた。今後の課題としたい。

発表の後は、KIOST の見学ツアーがあり、海産藻類の巨大な培養槽などを見せていただいた。その後、再び大型バスでホテルに戻り、ホテルの食堂での懇親会となった。おいしい料理とお酒を囲んで、あちこちのテーブルから楽しそうな声が上がっていた。若い研究者たちが気後れすることもなく、両国の会長や副会長とも楽し気に語る様子が印象的であった。

最終日はエクスカージョンが行われ、大型バスで Bijarim Forest に連れて行っていただき、カヤの林を散策した。最後は空港まで送っていただき、至れり尽くせりの歓待を受けた。



上は KIOST での全体写真 (KSOP 提供)

KSOP のご厚意により、Registration Fee が約 1 万円で、この中に、Welcome Reception 代、大型バスのチャーター料、2 日間の昼食、懇親会にエクスカージョンの費用も含めていただいたことで、学生さんたちにとっても参加しやすい大会となったことも特記しておきたい。

また、大会では、シンポジウムとポスターセッションでベストプレゼンテーション賞が選ばれ、KSOP のご厚意で賞金 100,000 ウォン (約 1 万円) が副賞として授与された。授賞されたのは以下の方々である。

シンポジウムのベストプレゼンテーション賞

(日韓 1 名ずつ)

Takashi Shiratori (Japan Agency for Marine-Earth Science and Technology: JAMSTEC), Duck Hyun Lhee (Sungkyunkwan University)

ポスターセッションのベストプレゼンテーション賞

(日韓 2 名ずつ)

Mayumi Sugiura (Nara Women's University), Akinori Yabuki (JAMSTEC), Seung Won Nam (Nakdonggang National Institute of Biological Resources), Ji-San Ha (Sungkyunkwan University).

今回の日韓合同大会は、韓国の原生物学会の温かいおもてなしを受け、両学会の会員同士の交流を深めることができ、全体として成功裡に終わったと言える。日本と韓国は距離的にも近く、日本国内で旅行するのと変わらないくらいの時間で韓国に行けるのだということを改めて思った。今後も両国の特徴を活かしつつ、学会や共同研究の強いきずなを築いていければと思う。二年後には日本で行いたいという思いを互いに確かめつつ、大会は幕を閉じた。



上は懇親会の様子。前列中央は、現 KSOP 会長の Myeong Heon Shin 氏、後列右端は、前 KSOP 会長の Mann Kyoon Shin 氏。

日韓合同原生生物学会議への派遣助成者の参加報告

内之宮 光紀 (電力中央研究所)

2018年7月13-15日に開催された、日韓合同原生生物学会に参加させていただいた。開催地の濟州島は、海に囲まれた美しい島である(写真)。初日の夜にはホテル近くの店で Welcome reception が行われた。私は Jong Soo Park 先生とその学生さんと同じ席で、色々話をさせていただいた。次世代シーケンサーを用いた研究など、私自身の研究と関係する情報もうかがうことができ、大変有意義な時間を過ごすことができた。

2日目は KIOST にてシンポジウムが行われた。日韓両学会の若手研究者の発表が行われ、韓国側は地元であるということもあって学生さんの発表も多かったように思う。もちろん内容は非常に充実しており、個人的には、Jaeho Choi さんの高塩環境の原生生物に関する研究が今後の発展性も含めて非常に興味深かった。私の発表は純粋な理論研究であり、どのようなリアクションがあるか少々心配していたが、他の生物への応用可能性などのアドバイスをいただくことができた。また、KIOST の Young-Ok Kim 先生に研究を非常に気に入っていただき、後日論文を送らせていただいた。シンポジウムのあとはポスター発表が行われ、各所で盛んに議論が繰り広げられていた。私自身はポスター発表を行わなかったが、他の方々の発表は大変参考になった。夜の懇親会でも韓国の学生さんやポスドクの方と研究以外にも様々な話をさせていただき社会情勢の違いなども感じた。特に、博士課程を卒業した方が就職に有利であることや兵役の苦労話などは日本とは状況が全く異なるため貴重であった。

最終日の3日目はエクスカージョンで、Bijarim Forestなどを巡った。Bijarim Forest は韓国の天然記念物に指定されているだけあり、豊かな植物や様々な昆虫を目にすることができた。眺めるだけでももちろん楽しかったが、動植物を同定して日本と比較できればより楽しめたかもしれない。

全体を通して、非常に有益で楽しい学会であった。今回の経験を糧に、微力ながら原生生物学に貢献していきたい。最後に、このような素晴らしい機会をいただき、日韓双方の実行委員の先生方には心より感謝申し上げます。



懇親会会場近くの海

風間 真 (長崎大学)

2018年7月13日から15日まで Jeju の KIOST で開催された日韓合同原生生物学会に参加させていただきました。まずは参加費助成対象者として参加できたことに心から感謝申し上げます。本大会は、私にとって2つの意味で大変に有意義な経験になりました。

私は赤痢アメーバを研究対象としております。発表当日まで病原性の原生生物を研究対象とする参加者は少数派だろうと危惧しておりました。加えて本大会は、私にとって初めての英語による口頭発表でした。そのため、できるだけ多くの交流と充実した議論を図るために、同一タイトルのポスターも発表させていただきました。実際に病原性の原生生物の研究者は少数派でしたが、私の興味はオルガネラの特徴や真核細胞の進化であったためか、場違いな印象もなく、赤痢アメーバの生活環や実験手法に関する質問も複数いただき、また(異なる材料による)類似した研究例もご教示いただきました。

「韓国」とのジョイントであったことも幸いでした。私の現所属では病原真核微生物のナショナルバイオリソース事業を分担しております。そして本原稿を執筆している今、韓国版のバイオリソース (Korea National

Research Resource Center, KNRRRC) より短期留学生在中です。この留学生は、私が日韓ジョイントミーティングから帰国した翌週より来日しています。私は KNRRRC という機関について全く知らずにいたのですが、韓国の諸先生方はよくご存知で、今回の大会中にいろいろな情報を頂戴できました。また一方で、Jejuでの体験、発表要旨集、集合写真が今は留学生との会話のネタになっています。この縁を足掛かりに新たな研究の輪を作っていけたらと期待しております。次回の日本側での開催では、より一層の盛り上りを祈念する次第です。

今回の会場となった Jeju は、私の住む長崎からは京都と同程度の距離です。しかし適切な乗換え便が見つからず、結局は閉会翌朝の便を利用する羽目になりました。宿泊延長など奈良女子大学の春本晃江先生には大変お世話になりました。最後に、今回の参加費助成対象者中で私は間違いなく最年長かと思えます(一応、科研費の若手資格あります)。参加について背中を押して下さった神戸大学の洲崎敏伸先生、東海大学の橘裕司先生にこの場を借りて感謝の意をお伝えできれば幸いです。

小林 真弓 (神戸大学)

このたびは、日韓 joint meeting のシンポジストに選出いただき、また参加するにあたって助成して下さった日本原生生物学会と会員の皆様に心より感謝申し上げます。

私にとって、今回の発表は国際学会における初めての口頭発表で、大変貴重な経験をさせていただきました。発表内容は、私が奈良女子大学で学位を取得したあと、神戸大学洲崎研究室で約 2 年間にわたって行ってきた研究についてです。本発表では、Ultrastructure and molecular architecture of kinetocyst (an extrusive organelle) in *Raphidiophrys contractilis* (Centrohelida) という題目で、餌生物の捕獲に関与する細胞小器官キネトシストの構成分子の 1 つとして major vault protein を同定したこと、クライオ電顕を用いてキネトシストの微細立体構造の解析を行なった成果を報告しました。まだ研究の初期段階ではありますが、キネトシストの微細立体構造の解明と分子の同定に向けた基礎となるデータと具体的な手法、キネトシストのダイナミックな構造変化の面白さを示せたのではないかと思います。

今回の joint meeting は、日本原生生物学会の年次大会における参加者と比べると人数こそ少なくはありましたが、若手の比率が高く、これまでになく若手との交流を密に行うことができたように思います。夜遅くまで若手で集まり、今後のキャリア形成や原生生物学会若手の会の活動のあり方について、意見交換を行い

ました。また、懇親会の場合では、若手の会の今後について、沼田会長と話す機会もありました。さらに、エクスカージョンや食事、自由時間を通して、韓国の文化や自然を満喫することもでき、全体にわたって大変有意義な時間を過ごすことができました。

joint meeting を通して得られた経験を、今後の研究者としてのキャリア形成に活かすため、よりいっそう努力し続けたいと思います。最後になりましたが、赴任直後であるにもかかわらず、日韓 joint meeting への参加を快諾して下さった、現所属の中央水産研究所の皆様に、この場を借りてお礼申し上げます。

柴田 あいか (立命館大学)

2018 年 7 月 13 日- 15 日に韓国済州で開催された日韓合同原生生物ミーティングに参加いたしました。宿泊したラマダホテルのすぐそばは漁師町なのか船がたくさん泊まっており、四国の離島育ちの私は何となく懐かしい感じがする所でした。着いて一日目のウェルカムレセプションでは、済州でとれた様々な海産物の次々とたくさん出てきて、青いトウガラシの食べ方を教えていただいたりして和気あいあいと楽しく過ごしました。

2 日目のミーティング当日は初めての英語での口頭発表であったこともあり、自分の発表の順番まで、とても緊張していましたが、発表後のランチタイムやコーヒープレイクでは韓国の先生方や学生さんが、ミドリゾウムシの共生について質問してくださり、アドバイスもたくさんいただきました。皆さんにたくさん話しかけていただいたおかげで、その後のポスター発表の時間はリラックスして発表を聞いて回ることができ存分に楽しめました。発表内容も材料の生物の様々で原生生物研究の多様性を実感しました。

ミーティング会場の Korea Institute of Ocean Science & Technology (KIOST) の Jeju International Ocean Science Center for Research & Education は、風車のたくさん並ぶ広々としたのどかで素敵なところに建っており、ミーティング後には、施設内を案内していただきシアノバ

クテリアの大量培養用の温室や、海洋生物飼育施設を見ました。大きなプールでぐるぐる回っているシアノバクテリアを、これまで写真では見たことがありましたが実物を見るのは初めてだったのでうれしかったです。

また、日本から参加の皆さんとは 3 日間、ずっと一緒にバス移動だったので日韓交流だけでなく日本人同士の交流の機会も多くあり、皆様に大変お世話になりました。様々な刺激を受けこれからも頑張っていこうと思える良い機会になりました。このような機会を与えていただいたことに感謝し深くお礼申し上げます。

白鳥 峻志 (海洋研究開発機構)

私は7月13日から15日にかけて、韓国・済州島で開催された日本原生生物学会・韓国原生生物学会ジョイントミーティングにシンポジストとして参加しました。直前に日本微生物生態学会に参加していたため、沖縄から釜山経由で済州島に向かいました。釜山行の飛行機では、数日前に兵役が終わり、来年から日本の大学に留学する予定という韓国人の学生（今回のミーティングとは無関係）と席が隣になり、韓国語やおすすめの料理などを教えてもらいました。

一日目はホテルに到着後、海辺のレストランでウェルカムレセプションが催され、済州島の海の幸を堪能しました。

二日目に行われたシンポジウムでは、日本と韓国の若手研究者が6名ずつ口頭発表を行いました。韓国のシンポジストはみなさん堂々とした発表で素晴らしかったです。私は「A novel predatory bacterium and the early evolution of eukaryotes」というタイトルで発表しました。原生生物という枠から外れたイロモノな発表にもかかわらず、多くの方に興味を持っていただき、ベストプレゼンテーションとして表彰していただきました。

シンポジウムの後は韓国の Wonho Yih 先生による講演があり、*Mesodinium* について話されました。その後はポスターセッションが行われました。日韓合わせて31題の発表がありました。*Pirsonia* のような珍しい原

生生物についての発表もあり、興味を惹かれました。またクリプト藻の微細構造に関するポスター発表では、驚くほど綺麗な電子顕微鏡写真が展示されていて印象に残りました。

三日目はエクスカージョンが行われ、Bijarim Forest という、済州島にあるカヤの林を散策しました。今回のジョイントミーティングに参加して、日本では聞けない研究発表をいろいろと聞くことができ、とても良い刺激になりました。最後に、本ジョイントミーティングに携わった日韓両学会の先生方と、参加費の援助をして頂いた日本原生生物学会に感謝申し上げます。

西上 幸範 (京都大学)

2018年7月13～15日の日程で韓国の済州島で開催された“Joint Meeting of the Japan Society of Protistology and the Korean Society of Protozoologists”に参加しました。済州島には関西国際空港から直行便が出ており、家を出てから四時間程度で到着したので、海外に来たというよりは、自然豊かな日本の田舎に来たような気持ちになりました。“韓国のハワイ”と言われ、南国リゾートを気軽に楽しめる場所として多くの日本人が空港内外にいたことや、空港職員や売店の店員の方が流暢な日本語で話しかけてくるなどといった雰囲気もこの場所を身近に感じさせてくれました。

一日目はウェルカム・レセプションがありホヤやサバの刺身といった地元の食材を使った面白い料理を食べることが出来ました。一緒に添えられていた、生の唐辛子は非常に辛く、日本からの参加者約一名が唐辛子を触った手で目をこすり負傷していましたが、それも良い思い出です。

二日目は、ポスター発表に加えて“Emerging Young Researchers at the Cutting-edge of Protistology in Korea and Japan”という内容でシンポジウムが行われました。どの発表内容も非常に興味深かったのですが、Sungkyunkwan University で博士課程在学中の Duckhyun Lhee さんのポーネリアを用いた研究が印象的でした。私自身は“Sliding behavior of ciliates near a wall”と題して最近出版した繊毛虫の行動に関する内容を話しまし

た。これらに加えて、Kunsan National University の Wonho Yih 教授から Special lecture という形で *Mesodinium rubrum* という繊毛虫に関して詳しい話を聞くことができました。この生物の発見から、難しかった培養を克服して大量培養ができるようになるまで、さらにヒトにとって有用な物質を化学的に精製するといった研究の歴史を教えてください、原生生物と人とのかわりを考える上でとても参考になりました。

今回、本研究会に参加し、この分野の面白さを再認識したことに加え、日本の研究の独創性も強く感じる事が出来ました。今後も日韓はもちろんその他の国とも交流を深めてお互い高め合いながらさらに面白い分野に発展させていきたいと感じました。本学会の参加費は日本原生生物学会より助成して頂きました。学会員の皆様に深くお礼申し上げます。

学会活性化委員会からのお知らせ (お願い)

委員長・園部 誠司 (兵庫県立大学)

日本原生生物学会第 51 回大会 (松江) で若手の会との共催でシンポジウムを行います。ぜひご参加ください。

タイトル:

実はこんなに魅力的! 理科教育に役立つ原生生物たち

日時: 10 月 21 日 (日) 13:00 ~ 15:20

場所: 島根大学大学ホール

演者と演題:

- 柴田 あいか氏 (立命館大学)
「原生生物若手の会の紹介」
- 末友 靖隆氏 (岩国市ミクロ生物館 館長)
「これなら簡単, 手間いらず! 小魚や二枚貝のエサ調べ」
- 園部 誠司氏 (兵庫県立大学大学院生命理学研究科)
「原生生物を用いた細胞運動の研究と実験」
- 宮城島 進也氏 (国立環境研究所)
「細胞内共生と光合成生物の進化・多様化」

お願い

昨年の総会で準会員制度についてお認めいただき、現在、高校の先生方を対象に勧誘を行う準備をしているところです。勧誘の際に入会の可否に最も大きな影響を与えられるのは入会のメリットがあるかどうかだと思います。入会のメリットとして年会費や大会参加費が低額であることがありますが、学会員とのつながりができる事が大きいのではないかと考えています。教育現場における学会員の様々な面からのサポートです。そこで、入会後に学会員からどのようなサポートが受けられるのか、という点を明らかにするために、先日アンケートを実施しました。しかしながら、回答数が 20 余りと非常に少なく、全国的に準会員を勧誘するには少々心もとないデータしか集めることができませんでした。

そこで、この紙面をお借りして、再度会員の皆様のご協力をお願いしたいと思います。まだ回答をお送りいただいていない会員の皆様、何卒、よろしくお願ひいたします。

学会等開催情報

◆ The Asian Congress of Protistology (ACOP)

The Asian Congress of Protistology (ACOP) が下記の日程で開催されます。皆様ふるってご参加下さい。

日程: 2018 年 11 月 23 日 (金) ~ 25 日 (日)

場所: Guangzhou, China

備考:

大会案内等は (http://protistology.jp/a_files/2018acop/2018acop.zip) をダウンロードしてご確認ください。予稿の申し込みの締切は 10 月 15 日 (月) です。

若手の会 通信

若手の会 2018 松江大会アウトリーチ活動のご案内

柴田 あいか (立命館大学)

第 51 回日本原生生物学会大会 (松江) が島根大学・松江キャンパスにおいて開催されます。その中の公開シンポジウムの前後の時間で若手の会主催のアウトリーチ活動を下記の日程で行う予定です。今回の活動では、皆様に原生生物に親しんでいただくために、教科書に登場する原生生物を中心に実物展示と若手研究者による解説を行います。中高生、教員などを対象としていますが、どなたでもご参加いただけますので気軽にお立ち寄りください。

アウトリーチ活動

日程 2018 年 10 月 21 日 (日)

時間 12:00 ~ 13:00, 15:30 ~ 16:00

場所 島根大学松江キャンパス大学ホール前ロビー

対象 中高生、教員など (それ以外の方も大歓迎!)

内容 ゾウリムシ、アメーバなどの教科書に登場する原生生物の実物展示と若手研究者による原生生物ミニ講座

- ・教科書などに登場する有名な原生生物を展示。
- ・動画を用いた原生生物の解説。

※予定については今後変更する場合がございます。

本活動は、公開シンポジウムのすぐそばの会場でを行います。シンポジウムに行くついでに、身近な原生生物の世界を覗いてみてはいかがでしょうか。

若手の会役員からの挨拶・自己紹介

今年から原生生物若手の会は新たに役員を迎えました。そこで、役員より一言ずつ挨拶と自己紹介を述べたいと思います。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

柴田 あいか (立命館大学)

今年から若手の会長を務めさせていただきます。若手の会が若手研究者のやりたいことを実現できる場になるよう盛り上げていきたいです。

小林 真弓 (中央水産研究所)

これまでに、繊毛虫ブレファリズマの有性生殖や分類、有中心粒太陽虫ハリタイヨウチュウの細胞小器官キネトシストの分子構造に関する研究を行ってきました。

樋口 里樹 (神戸大学)

ミドリゾウリムシに細胞内共生する緑藻クロレラの共生に関わる因子の研究と、人の角膜感染症を引き起こすアカントアメーバの殺滅方法の研究をしています。共生、寄生、感染のメカニズムに興味があります。

桐間 惇也 (アップ教育企画)

歩く繊毛虫ユープロテスの動きに魅せられてから、鞭毛・繊毛運動に興味を持ちました。博士研究ではクラミドモナスの新規鞭毛関連タンパク質を同定し、それが微小管内部に存在するタンパク質のひとつであることを示しました。現在、塾で講師をしております。実験教室を開きたいです。

梁瀬 隆二 (筑波大学)

私は原生生物の多様で特殊な細胞運動機構や細胞機能、細胞構造の役割に興味を持っています。現在は海洋を中心に生息する微細藻類ハプト藻が持つ多機能装置ハプトネマの機能メカニズムについて研究を行っています。

池田 理佐 (岡山大学)

タイヨウチュウを用いて細胞運動機構に関する研究を行っています。主に微小管に着目した形態学的な解析を行ってきました。現在は細胞運動を制御している微小管結合タンパク質の同定を試みています。

井坂 友紀 (奈良女子大学)

私は *Blepharisma* の共食いにおけるジャイアント化の研究を行っています。主に細胞の形態に焦点を当てて、ジャイアントの形態的特徴や形成過程を明らかにすることを目的としています。

内之宮 光紀 (電力中央研究所)

仕事では放射線が生物に与える影響について数理モデルを使って研究していますが、学生時代から生物の協力行動の進化に興味を持っており、キイロタマホコリカビの子実体形成の進化について数理モデルを使った研究もしています。

大北 千紗 (奈良女子大学)

繊毛虫 *Blepharisma* は飢餓条件下では共食いを行い、共食いした細胞がジャイアントと呼ばれる巨大細胞を形成することが知られています。このジャイアント化の過程に興味があり、ジャイアント化する際の遺伝子の発現変化を研究しています。

■唐澤 宗宏 (神戸大学)

私はハリタイヨウチュウを用いて、捕食のメカニズムを研究しています。この研究が生物の食作用に関わる新たな知見を提供できるよう、生物と自分自身を日々見つめ直して、これからも研究に励む所存でございます。

■佐々木 愛澄 (奈良女子大学)

私は繊毛虫の一種であるブレファリズマの凍結保存を目指して研究をしています。凍結保存が成功すれば、細胞をそのままの状態でも長期保存することが可能になり、老化や遺伝子変異を防ぐことができます。

■末友 靖隆 (岩国市ミクロ生物館)

微小な生物達が持つ多彩な魅力を社会に還元すべく、会員の皆様からの多大なご支援を受けながら「理科・環境教育への利活用」を中心に様々な活動を展開しています。詳しくは当館監修「日本の海産プランクトン図鑑」(共立出版)をご一覧いただければ幸いです。

■塚越 亮允 (鳥取大学)

今年度から若手の会に参加いたしました。塚越と申します。所属は鳥取大学ですが島根大学で、ミドリゾウリムシを用いて細胞内共生と生体鉱物について研究しております。これから宜しくお願ひ致します。

■中村 憲章 (福井県立大学)

福井県立大学大学院の中村憲章と申します。私が入り組んでいるのは、水中の微細藻類である珪藻を、ゲノムから探求することです。中でも、近年はオルガネラゲノムに着目し、その遺伝様式の分析も行っています。

日本原生生物学会若手の会では、皆様のご意見を募集しています。ご意見、ご要望をお寄せ下さい。
また、若手の会役員も随時募集しています。興味のある方は (young.protistologists.jsp@gmail.com) までご連絡ください。
若手の会ホームページ <https://sites.google.com/site/youngprotistologists/>

2018年度 若手の会役員

会長
柴田 あいか (立命館大学)
副会長
小林 真弓 (中央水産研究所)
会計
樋口 里樹 (神戸大学)

Web

桐間 惇也 (アップ教育企画)
梁瀬 隆二 (筑波大学)
役員
池田 理佐 (岡山大学)
井坂 友紀 (奈良女子大学)
内之宮 光紀 (電力中央研究所)

大北 千紗 (奈良女子大学)
唐澤 宗宏 (神戸大学)
佐々木 愛澄 (奈良女子大学)
末友 靖隆 (岩国市ミクロ生物館)
塚越 亮允 (鳥取大学)
中村 憲章 (福井県立大学)

「原生生物」は、日本原生生物学会が機関誌として発行する和文誌で、原生生物学に関係する学術情報の発信、原生生物学研究者の議論の場の提供、学会員間の情報交換を目的とする。原則として年に2回発行するが冊子体は作成せず、PDFファイルとして学会ホームページからのダウンロードにより配信する。

掲載する学術論文は、独自の新しい研究成果を報告する〈原著論文〉、原生生物学の特定分野の研究について概説する〈総説〉、近年公表された論文や試験的な取り組みについて議論する〈コメンタリー〉、原生生物学分野の著作物を紹介する〈書評〉を掲載する。原著論文は、英語版を含めてこれまでに公表されていないかまたは他誌 (*Journal of Protistology* を含む) に投稿中でないものに限る。総説、コメンタリー、書評についても、これまでに公表されているものと内容が大きく重複しているものは掲載しない。

投稿者は会員・非会員を問わない。原著論文以外の記事は編集委員会から執筆を依頼する場合がある。また、編集委員会は必要に応じて特別寄稿などを企画し、この執筆を依頼する場合がある。

原稿は執筆要領に従って作成する。原著論文、総説、コメンタリーについては、編集委員会から執筆を依頼した場合を含めて、2人以上の専門家による査読を経て掲載する。掲載にあたって寄稿者は、国際的な著作権ルールであるクリエイティブ・コモン・ライセンスの1つ、CC BY 4.0に同意する必要がある。

1. 原稿の送付先・投稿に関する問い合わせ先

原稿は電子メールに添付して下記あてに投稿する。10 M バイト以上の大きなファイルを送付する場合は、事前にメールで問い合わせること。

法政大学生命科学部

日本原生生物学会編集事務局

廣野雅文

E-mail: hirono@hosei.ac.jp

〒184 - 8584 東京都小金井市梶野町 3 - 7 - 2

TEL: 042 - 387 - 6132 / FAX: 042 - 387 - 7002

2. 執筆要領

原著論文、総説、コメンタリー、書評のいずれにも字数や図の数に制限は設けていないが、内容に応じたコンパクトさが求められる。総説、コメンタリー、書評の執筆にあたっては、馴染みのない専門用語の多用を避ける、平易な表現を心がける、理解の助けになるような図を挿入する、などの工夫をして、専門分野の異なる研究者および大学院生でも理解できる内容とすること。

(1) 原稿の書式

すべての原稿は原則として MS Word (.doc, .docx) で準備する。本文、表、図の説明文を含めて、全て A4 サイズの用紙を設定し、各ページの周囲に約 2.5 cm の余白をあける。投稿時の原稿のフォントは特に定めないが、汎用性の高いものを使用し、査読に適した 10 - 12 ポイントのフォントサイズとすること。

句読点は「、」と「.」を用い、本文中の括弧は、全角の括弧を用いる。英文、英単語、数字、単位等を用いる場合は半角文字とし、その前後に半角スペースをおく。英数字の文字列内の括弧は半角を用い、その前後に半角スペースをおく。

原著論文、総説、コメンタリーの原稿は、1 ページ目に論文題目 (日本語のみ)、著者名 (日本語とローマ字併記)、所属と所在地、副題 (25 字以内)、キーワード (タイトルに含まれない語句を 5 個以内)、連絡すべき著者の氏名、住所、TEL 番号、FAX 番号、e-mail アドレスなどの情報を記載する。2 ページ目以降には、要旨 (日本語 250 字以内)、本文、引用文献リスト、表、図の説明を順に記載する。原著論文の本文は、序論、結果、考察、材料と方法、謝辞の順に記載し、総説とコメンタリーの本文は特に形式を定めない。

書評の原稿は、1 ページ目に記事題目、著者名 (日本語とローマ字併記)、所属と所在地、TEL 番号、FAX 番号、e-mail アドレスなどの情報を記載し、2 ページ目以降の書式は定めない。

(2) 生物名, 遺伝子名, 単位などの表記

- a. 生物名: 初出箇所において正式な学名をイタリックで記し, 他の属名と混同する可能性がなければ, 属名はその後イニシャルのみに省略する. 生物の通俗名を用いる場合は, 初出時に正式な学名を併記する.
- b. 生物名以外のラテン語の標記はイタリックにしない (例, *in vivo*, *de novo*).
- c. 遺伝子名ならびに遺伝子産物の名称: 原則として遺伝子名はイタリックで記し, その産物であるタンパク質名はイタリックにはしない. なお, それぞれの生物種で用いられている命名法および表記法に従い, 適切に記述すること.
- d. 単位: SI 単位を用い, そのルールに従って適切に表記する.
- e. 記号: 数学的記号と数字の間には半角スペースを入れる (例, $1 + 2$, $1 < 2$). ただし次のような場合は半角スペースを入れない. $2 \times \text{TBE}$, -85°C , 10% , 360° , $1-100$.
- f. 数字: 3 桁ごとにカンマを入れる. (1000 ではなく 1,000).

(3) 引用文献

本文中の引用文献は下記のように記載する.

- a. 著者が 1 名の場合: Hiwatashi (1965), または (Hiwatashi, 1965; Allen, 1974); 藤島 (2010), または (藤島, 2010; 浅井, 2011).
- 著者が 2 名の場合: Nozawa and Thompson (1971), または (Nozawa and Thompson, 1971; Satow and Kung, 1976a, b); 藤島・堀 (2010), または (藤島・堀, 2010; 藤島・堀, 2011a, b).
- 著者が 3 名以上の場合: Tanabe et al. (1990), または (Tanabe et al., 1990, 1991); 藤島ほか (2010), または (藤島ほか, 2010, 2011a, b).
- 印刷中の論文の引用は, 姓の次に (*in press*), または (印刷中) と書く. 投稿中や投稿準備中の論文の引用は, 本文中に (Numata, O., *personal communication*), または (Numata, O., *unpublished data*); (沼田治, 私信), または (沼田治, 未発表データ) のように書き, 引用文献のリストには書かない.
- URL の引用は, 本文中で括弧内に (http://protistology.jp/journal_j.html) のように書き, 引用文献のリストには書かない.
- b. 本文中で引用した論文は, 本文の最後の引用文献にアルファベット順に下記の例のように記載する. 引用文献の正確な表記に関しては著者が責任をもつこと.
- 雑誌に掲載された論文: Ishida, M., Aihara, M. S., Allen, R. D. and Fok, A. K. (1993) Osmoregulation in

Paramecium: the locus of fluid segregation in the contractile vacuole complex. *J. Cell Sci.*, 106, 693–702.; 石田正樹, 富永貴志 (2006) ゴウリムシの収縮胞複合体. *原生動物学雑誌*, 39, 157–172.

- DOI が付されている場合は必ず併記する: Takahashi, T., Shirai, Y., Kosaka, T. and Hosoya, H. (2007) Arrest of cytoplasmic streaming induces algal proliferation in green paramecia. *PLoS ONE*, 2, e1352. doi:10.1371/journal.pone.0001352.
- 雑誌名の略は, NCBI (ISO Abbreviation, <http://www.ncbi.nlm.nih.gov/nlmcatalog/journals>) を参考にして記載する.
- 単行本の章: Takahashi, M. (1988) Genetics. *In: Paramecium*. Görtz, H.-D. (ed.). Springer-Verlag, Stuttgart, pp. 271–281.; 藤島政博 (1988) 遺伝学的な実験法. *原生動物の観察と実験法*. 重中義信 (編), 共立出版, 東京, pp. 191–226.
- 単行本: Beale, G. H. (1954) *The Genetics of Paramecium aurelia*. Cambridge University Press, Cambridge.; 重中義信 (1981) *原生動物*. 東京大学出版会, 東京.

(4) 表

表は, MS Word もしくは MS Excel で別ページ上に作成し, 内容を説明する表題とその説明文をつける. 表には, 表 1 や 表 2 のように, 本文で使用する順に一連の番号をつける. MS Word のコメント機能などを用いて, 引用とは別に, 本文中に表の挿入箇所を示してもよい.

(5) 図

投稿時の原稿には PDF 形式にした図を添付する. 査読を経て受理された後に, TIFF, EPS, または JPG 形式の図を提出する. このとき, グラフや写真等は, A4 ファイルサイズ上で 300 dpi 以上の解像度になるように作成すること. 図に使用する文字, 数字等は, 最終サイズが 1.5 mm 以上の高さになるようにする. 図 1 や 図 2 のように, 本文で使用する順に一連の番号をつけ, ファイル名には著者名 (共著の場合は代表者名) と図の番号を記すこと. 複数の写真や線画 (A, B, C, D など) から構成される図の場合, 一つの合成イラストファイルとして投稿すること. 本文中での図の引用においては, (図 1), (図 1A), (図 1A, B), (図 1A–D) のように記すこと. 引用とは別に, MS Word のコメント機能などを用いて, 本文中に図の挿入箇所を示してもよい.

編集委員会からのお知らせ

編集長 廣野 雅文 (法政大学)

新しい和文誌「原生生物」も第 2 号を配信する運びとなりました。創刊号でお知らせしましたとおり、日本原生生物学会の機関誌である当雑誌は、学会会報としてだけでなく、学術情報の発信という重要な役割も担っています。この度、遅ればせながら、その学術論文の投稿規定を新たに作成いたしました。この号にも掲載いたしました。学会ホームページからいつでもダウンロードできます。

学術論文・記事の種類としては、〈原著論文〉に加え、原生生物学の特定分野の研究について概説する〈総説〉、近年公表された論文や試験的な取り組みについて議論する〈コメンタリー〉、原生生物学分野の著作物を紹介する〈書評〉を掲載いたします。前身である原生動物学雑誌と同様に、和文による情報発信、討論の場としてご活用ください。

今回の投稿規定の公開により、前編集委員会と現編集委員会が注力してきた学会誌の大改革がひとまず完成したことになります。原生動物学雑誌の英文誌と和文誌への分冊、J-STAGE を利用した英文誌の完全電子ジャーナル化、誌面の A4 化を含めた体裁・デザインの一変など、どれをとってもたいへん大きな変革で、本当に実現できるのかと不安でしたがすべて達成することができました。これも会員の皆様のご理解とご協力のおかげと感謝しております。

しかし、2 つの雑誌はまだ器 (形) が出来上がった段階であり、今後は *Journal of Protistology* の知名度を上げ、論文の投稿・掲載数を増やすなど、中身をさらに充実させていかなくてはなりません。そうすることによって、いずれ PubMed への登載とインパクトファクターの取得も見えてくるはずですが、そのためには、新たに完成されたこの雑誌の形を維持して、良い論文を掲載するという実績を積み重ねるしかありません。そしてその論文は、会員の皆様からの投稿が頼りです。

この雑誌改革により英文電子ジャーナルを得た日本原生生物学会の発信力は、格段に高まったといえます。しかし、論文掲載の敷居が高くなったわけではありません。以前からの繰り返しになりますが、2 つの雑誌は会員の皆様のためのものです。どうかご投稿をよろしくお願いいたします。

現編集委員会はもうすぐ任期を終えます。新しい 2 つの雑誌が会員の皆様の情報発信と討論の場として、学会とともに発展していくことを願ってやみません。

事務局からのお知らせ

庶務 細谷 浩史 (神奈川大学) ・ 庶務補佐 北出 理 (茨城大学)

(1) 故月井 雄二先生のご遺族から、ご遺産の一部を日本原生生物学会に寄付したいというお申し出がありました。沼田会長から、故月井先生の兄上、月井 誠一様に、この寄付金を当学会の若手研究者と大学院生、学部生の国際学会参加の援助に使用させていただく事をご提案し、快諾を頂きました。頂いた寄付金により「月井 雄二記念国際交流基金」を設置することが評議員会で承認されました。

(2) 今年度の本学会学会賞等の選考は、学会賞等選考委員会委員長 (月井先生) の御逝去により、会長を選考委員長として実施されました。応募者がありました「学会賞」について選考を行い、選考結果は評議員会で承認されました。

(3) 事務局から評議員会に以下の点についてお諮りし、承認をいただきました。

『学会員が亡くなられた時には、その方のお知り合いの方に略歴や研究の内容を 200 字から 300 字くらいでまとめていただき「原生生物」に投稿をお願いします。「あまり堅苦しくなく」という方針で書いていただく。編集委員会で確認と簡単な校正を行い「原生生物」に掲載する。』

『名誉会員の方々が毎年の大会に参加される際、大会参加費は徴収しないこととする』(松江大会より適用)

(4) 今年度の松江大会は、当学会と島根大学との共催とする事が決定致しました。

会費等振り込み先

郵便振替口座

郵便振替口座番号：01300-6-103583
加入者名：日本原生生物学会

銀行振り込み口座

ゆうちょ銀行（金融機関コード：9900）
店番：139 カナ店名：イチサンキュウテン（139店）
当座貯金 口座番号：0103583
受取人カナ氏名：ニホンゲンセイセイフツカヅカイ

原生物(GENSEI-SEIBUTSU) 第 1 卷 第 2 号

平成 30 年 10 月 3 日 発行

編集兼発行人：沼田 治（会長）

発行所：日本原生生物学会

〒162-8640 新宿区戸山 1-23-1

国立感染症研究所寄生動物部内（会計担当：永宗 喜三郎）

Tel: 03-4582-2693, Fax: 03-5285-1219

事務局：E-mail: gajsp@protistology.jp（庶務担当：細谷 浩史, 北出 理）

編集局：〒184-8584 東京都小金井市梶野町 3-7-2

法政大学生命科学部生命機能学科内（編集長：廣野 雅文）

Tel: 042-387-6132, Fax: 042-387-7002

E-mail: hirono@hosei.ac.jp
